

器物と文物の宝庫：世界の誇る久保記念館

ミヒエル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

<https://hdl.handle.net/2324/1654377>

出版情報：四三会誌. (84), pp.26-44, 2006-11-30
バージョン：
権利関係：



四三 会誌

2006

平成 18 年 11 月

第 84 号

記念講演録

「器物と文物の宝库——世界に誇る久保記念館」

ヴォルフガング・ミヒェル

久保記念館への接近

私は最初は化学を専門にしておりました。当時は、タンパク質の研究を進めており、また、丁度新しい技術として誕生した薄層クロマトグラフィーの研究にも携わりました。しかしドイツの若者は二十八歳までに兵役を果たさなければなりませんので、化学者の資格を取得したとたん召集状が届きました。父の影響もあったかと思えます

が、私は兵役を拒否し、内務省の管轄に回され地方都市の病院でいわゆる民間代替勤務 (ziviler Ersatzdienst) に就くことになりました。現在のドイツでは、この代替勤務を選択する若者が圧倒的に多いのですが、冷戦時代の社会環境では私のような「兵役拒否者」は極めて珍しく、我々に対する風当たりは強かったです。勤務内容は相当厳しいものでした。手術後の廃棄物など各種「ゴミ」の焼却、屍体の運搬、死体解剖の手伝いなど、今日の代替勤務では考えられないようなこともさせられました。

医師と看護婦はとても親切で大いに助けになりましたが、一年半の任務を終え、大学の有機化学研究所に戻ったときに、私はかなり落ち込んでしまい、体験を自分の中で消化することがなかなかできませんでした。苦悩に満ちた数ヶ月を経て、私は人間について勉強しようと決心し思い切って化学を辞めることにいたしました。両親も教授もちろん猛烈に反対しましたが、当時は若者は将来を考えるより、自己確立を求める時代でしたので、私は人文科学の世界へ入ることにいたしました。しかし、方法論や討論の進め方など、化学とは随分違う分野で、当初の戸惑いや苦労は決して少なくありませんでした。しばらくすると、人文科学は理学とは多少違う真実を追求しながらも、人間の存在を支える大変有意義なものだとわかりました。しかし、やはり私は自然科学が好きだったため、顕微鏡、研磨機、切断機などを手放すことはなく、鉱物及び化石



図1 久保記念館

などの収集も今日までずっと続けております。

二十八歳で来日したのは、全くの偶然からです。台湾出身の文学部の恩師・張教授の友人が九州大学の先生で、当時の教養部のための若いドイツ人教師を探していました。張氏の推薦により一、二年間のつもりで福岡へ来ることにいたしました。一年目の住まいは医学部構内にある外国人研究員宿舎でした。毎朝、当時の耳鼻科の木造の建物の前を通り、路面電車で六本松の職場へ通っていました。

宿舎の右奥にある久保記念館のドイツ語の看板に驚きましたが、館内のことは知らずにおりました。福岡での二年目だったか、突然耳鼻科の建物から皆さんが引き上げてしまいました。空き家となった建物の中に入ってみると、残された様々な道具類などが目につきました。また、階段式の講義室に腰を下ろし、その歴史ある雰囲気を感じた覚えもあります。そもそも帰国するつもりでしたので、記念に八ミリフィルムを撮ってみました。光不足のため、屋内の風景はあまり見えないものになってしまいました。

その後、私は医学部から離れた、市内の別の場所へ引っ越しましたが、研究活動としては、日本における医学、薬学、博物学の豊富な史料に魅了され、理学と化学にまたがる形で日欧交流を歴史的な視点から追究し、若い頃に取得した知識と日本での新しい史料と体験を結びつける分野の開拓に専念いたしました。結局、病院での代替勤



図2 久保記念館の裏側

務が刺激となり、これまでの人生の大半にわたり医者、医学者、薬学者と付き合いながら、蘭学、洋学、医史学、薬史学の研究に携わってきました。その関係で附属図書館の研究開発室員として医学分館の古書コレクションのお世話をさせていただいております。久保記念館の収蔵品に関する話は一九九二年頃、初めて耳にし、そのコレクションを一度ゆっくり見せていただければと思いましたが、昨年になってようやく耳鼻咽喉科の小宗静男教授のご厚意で館内の資料調査を行えるようになりました。小宗先生及び教室の皆様方の前向きなご姿勢と久保記念館に対する強いご愛着・ご厚情に大いに助けられましたことに、ここであらためて心よりお礼を申し上げます。

ご存知の通り久保記念館は、一九二七年、九大耳鼻咽喉科学教室の第二十回創立記念日に同窓会一同から久保先生に寄贈され、さらに九州大学に献呈された、今日の医学部構内で最も古い建物の一つです。私は、大正・昭和初期の建築様式に大変興味があります。当時ドイツではものの形をその機能に従属させる発想を持つバウハウス学派が誕生しました。建築、都市計画をはじめ、インテリア、各種手工芸品にいたるまであらゆる生活環境のものがこの機能主義に基づいて設計し直されました。興味深いことに、この発想の根源の一つとして、茶碗、竹製品、ふすま、たたみ、茶室など日本の美がありました。これらのものは当時のバウハウス派の人々にとって自分たちの神髄に非常に近いものがありましたので、それを大いに参考にいたしました。明治・大正の頃の日本でも、西洋の動きを念頭に置いた独特の和洋折衷式の建物が台頭しました。装飾の少なさは和風の精神の名残でしょうが、垂直線を強調する柱あるいは柱を思わせる化粧漆喰は西洋から取り入れました。装飾を入れる際に多いのは、日本の家紋などの伝統的図柄を思わせる、すっきりした線のデザインです。博物館として設計された久保記念館はギリシャ風の

寺院を連想させる雰囲気にも包まれています。建物は細長く比較的高いもので、入口の左右に祭壇や石灯籠のような短い柱があります。階段に近づくと、研究棟でも住家でもないことがすぐわかります。学問の小寺院と言えるかも知れません。また、冒頭に申し上げたドイツ語の看板からは「家主」と「訪問客」の国際性が読み取れます。

以前、杉岡洋一総長の裁量経費で医学分館の保存図書館における貴重図書を調査したとき、昔の医学部の書籍の大半がドイツ語版だったことに驚きました。日独両国の交流についてはもちろん承知しておりましたが、何

十列も続く棚の前に立つとその深さ・密接さとレベルの高さに圧倒されます。さらには、医学部の卒業生のアルバムの中に、授業風景の写真も含まれており、たくさんのドイツ語が書き込まれた黒板はこの印象をさらに強めます。残念ながら、一九二七年の開館式の頃の写真はまだ入手しておりません。これまでに見つかった一番古いものは昭和七年の教室開講二十五周年の際に撮影されたものです。^①戦後の空中写真や、医学部全体の写真では、建物自体は確認できませんが、記念館の詳細や館内の様子を観察できる画像資料は乏しいようです。二十世紀後半、しだいに建物の老朽化が進みました。一九九七年に日本医史学会の総会・大会が福岡で開催された際、耳鼻科の曾田豊二先生、整形外科の小林晶先生、順天堂大学医史学教室の酒井シツ先生と一緒に小宮山荘太郎教授の特別な計らいのお陰で一度視察させていただいております。当時は電気がつかず、中が良く見えなかったため、数多くの物品で各部



図3 入り口の柱

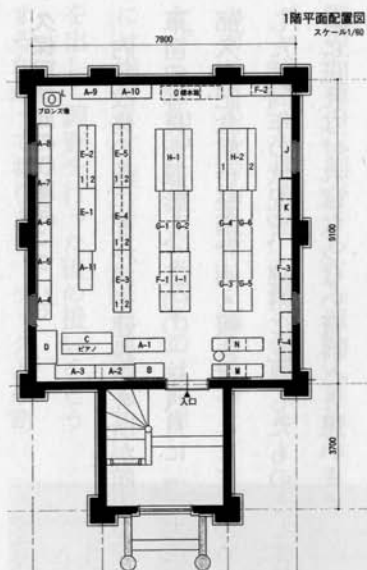


図4 旧1階の平面配置図

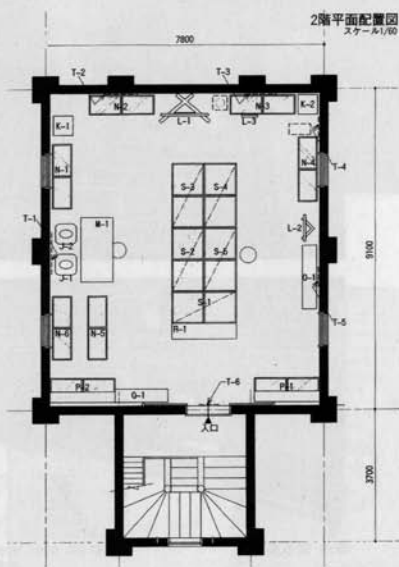


図5 旧2階の平面配置図（『九大医学部久保記念館再整備計画・報告書』2001年、より）

屋は非常に狭くなったという印象でした。収蔵品の保全と管理が危惧されたのは容易に想像できます。幸い四三会員の方々の積極的なご協力により、一九九九年及び二〇〇二年、建物の内装・外装を改修できました。皆様の活動を知ったとき、まことに感激いたしました。教室の伝統を大切にする姿勢は実に素晴らしいと思います。また、その歴史的価値をますます高めている、久保記念館を守るための同窓会の努力と犠牲は、次の世代にも大いに讃えられることと確信しております。

久保記念館の収蔵品について

内装改修の前に那の津寿建設研究所が館内の棚、
箆笥の写真を撮影し、二〇〇一年八月に『九大医学
部久保記念館再整備計画・報告書』としてまとめ
ました。同年の状況を、綿密に記録したものとして後
世に伝えなければならぬ資料だと思います。

改修前の一階には多数の本棚がありました。書籍

のほとんどは明治後期以降の学術書です。江戸・明治初期の資料は別所に保管されていました。また、外来記録、
入院記録、直達鏡検査簿、手術簿、教室の歴史を伝える資料も含まれていました。また、外来記録、

同じ一階の写真に見られる十三個の「標本箱」はおそらく、ロウ細工のムラージュだと思えます。古江増隆教授
が一度見せてくださった皮膚科の約百二十体は福岡美術会を組織した新島嘯風の作品ですので、おそらく耳鼻科の
ムラージュも同様に極めて貴重な国産品であると期待しております。また、摘出された異物のコレクションも見ら
れます。

当時の二階は展示室になっています。幸いなことに河田政一先生の「開学の精神と久保記念館」及び『九大耳鼻
科一九八七年』^③という印刷物に八十年代の様子を伝える写真が掲載されています。現在の二階にあるケースなどは

上部 標本箱13個



棚内 標本箱7個

W1760 D305 H750
木棚

図6 箱入りのムラージュ（『九大医学部久保記念館再整備計画・報告書』2001年、より）

ほぼ同様の配置となっており、絵画、久保先生とキリアン教授の肖像、江戸時代の写本類、明治以前の洋書、久保先生が交友していた海外の方々による寄贈品等々、器物資料と文書資料が多数残されています。

二〇〇三年三月、改修を終了してから、収蔵品は記念館に戻されました。その際、一階と二階の中身は入れ替えられました。昨年の春に館内視察したときには、古くなった本棚が処分されましたので、書籍のほとんどはダンボール入りのままでしたが、その他の資料はすべてきれいに収納されたように見え、一、二年ほどで全体を十分に把握できると思っております。しかし、

平成十七年六月、本格的な資料調査と記録の作成を開始して間もなく、病院に残っていた収蔵品が移され、一階の面積の二割がさらなる器物入りのダンボールで埋まり、二階の書籍入りのダンボールの山も著しく膨らみましました。この山の下の方にあるものは簡単には出せません。また、これらのものを出して調査を行った後の扱いをどうするか迷っております。ラックと箆筒



図7 旧二階の景観



図8 ヴィリディウス訳の『外科学』パリ、1544年版。

の数は著しく減りましたので、やはり新しい収納用品の購入を考えなければなりません。

結局、すでに本来の展示ケース及び整理箆筒に戻された、把握しやすいものを調査すると共に、收藏品に関するこれまでの記録資料、論文などを集めることにいたしました。最初に目にしたのは、二冊の目録でした。一つは、一九三二年の耳鼻咽喉科学教室が祝賀会のために編集した小冊子（日本語、ドイツ語⁽⁴⁾）です。序文で久保先生が編集にあたった「吉田、池田両学士、長野氏を始め、林、横田、柴牟田、高尾諸氏」に感謝を表明しています。もう一つは一九八五年第三十七回日本気管食道科学会が福岡で開催された機会に印刷された増補版（日本語、ドイツ語、英語⁽⁵⁾）の資料目録です。序文で河田政一教授が、向野助教と朔講師の貢献を強調しておられます。收藏品の分類や記述に久保先生の時代の認識が反映されたこの二冊は実に興味深い内容ですが、コレクションのほんの一部しか取り上げていません。また、「佐々木先生考案、改良器械」、「教室先輩考案器械」、「其他」のような具体性の乏しい項目もあり、古医書の書誌情報もあらためて確認、補充する必要があります。いうまでもなく、目下二階に保管されている、教室で日常的に使用された書籍及び外来記録、入院記録、直達鏡検査簿、手術簿や数千冊に及ぶ洋書⁽⁶⁾は、上記の目録には含まれておりません。それでも、この二冊の冊子は久保記念館の歴史の確認及び收藏品の調査の手がかりとして大変役立つています。

コレクションに関する数編の研究報告も貴重な参考資料となっています。代表的な例の一つは、村上卓也氏の「久保記念館の蔵書について」という論文です。⁽⁷⁾このような解説がもう少し集まれば作業はかなり楽になります。また、冒頭に申し上げた二〇〇一年の建設会社による再整備計画・報告書の中に、図書カードが入っていたと思わ

れる整理筆筒の写真が見られます。筆筒は処分されましたが、図書カードはいずれかのダンボールに入っていると期待しております。

資料データの取り方は戦後の半世紀に大きく発展してきました。例えば、一九三二年の冊子の「倭漢古医書」として「阿蘭陀外科」としか記されていない写本は、今日では次のように記録されます。

阿蘭陀外科（外題、打付、朱字）、一一・二×一四、三種、写本、四つ目綴じ、八六丁、一冊（「阿蘭陀藥種
以呂波寄」一〜二九丁、「阿蘭陀膏藥書」三〇〜六八丁、「阿蘭陀油能毒之書」六九〜八二、無題八三丁）、朱
入れあり、八三丁目に挿図あり、巻末に薬名が記された一四・九×七七、四種の貼り紙あり

また、今回の調査は、書誌学的に重要と判断される全てのページの撮影と、画像付きの文書資料データベースの蓄積を目指しています。

この作業を進めるうちに、コレクションの倭漢文書資料には二つの登録番号が付してあることがわかりました。昔の図書カードが見つかれば、その背景が見えてくるでしょうが、新目録にはどちらを採用すべきか、場合によりすべ

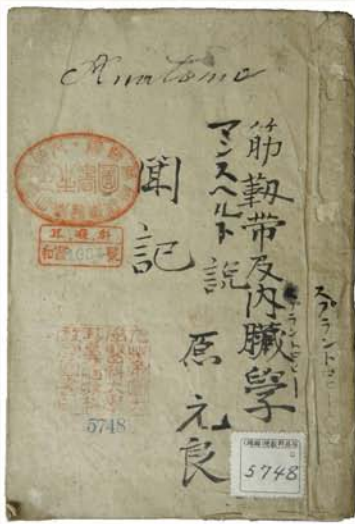


図9 オランダ人医師 C. G. van Mansvelt (在日期間 1866 ~ 1879) の講義録

ての番号を再び更新する必要があることを覚悟せざるを得ません。

蔵書印などとても貴重な情報になります。写本二、三点の場合は、下巻は久保記念館に保管され、上巻は医学分館の貴重図書コレクションに含まれています。それぞれの「欠本」の所在をしっかりと記録しておけば、再統合のややこしい問題を考えなくてもよいという気がいたします。

倭漢文書資料を概観してみれば、まず板本と写本を区別しな

ければなりません。前者は珍しいものでも全く同様のものがどこかに伝わっている可能性が高いのですが、写本は写者が修正、拡充、削除などを行うことが非常に多いので、各々のものは一種のオリジナルと見るべきです。桂川甫周の『和蘭字彙』、杉田玄白らの『解体新書』及び『重訂解体新書』など、板本の多くはいわゆる蘭学の産物ですが、『外科正宗回春』や吳昆の『脉語』のような東洋医学の伝統を引き継ぐものもあります。これらのほとんどは江戸期の最高水準の出版物に数えられます。写本の中では、十六世紀から十七世紀の三十年代にかけて日本で活躍していた南蛮人の外科術を示す金瘡医書及び南蛮系とされる栗崎流医書をはじめとし、代々出島商館の阿蘭陀通詞を務めた榎林家に遡るもの、外科術の巨匠華岡青洲の手術録及び東洋医学の経絡図など江戸期の日本人の知的好奇心、視野の広さ、独創性と発明力を物語るものが大いに注目し値します。



図 10 二本松藩医小此木屋之が使用した外科器械（オランダ製）

一階の展示室のケースに入っているものの中から重要なものをあげると、二本松藩の蘭方医小此木屋之が使用したオランダ製外科器械一式に言及せざるにいられません。文部科学省の特定領域研究「江戸のモノづくり」の計画研究プロジェクトとして江戸期の輸入医薬品と医科器械を調査いたしましたので、このような完全なセットは極めて稀なものであると断言できます。材料、寸法、色、構造、利用等々、記録の作成は文書資料より遙かに煩雑です。また、写真の数も膨大なものになる可能性があります。

耳鼻科のコレクションですので、当然耳鼻咽喉科学の業績を讃えるものが数多くあります。鼻茸の独創的な摘出法や咽頭検査法で歴史に名を残した片倉元周（一七五一〜一八二二）の関係で、元周が著した『静儉堂治験』（寛政六年刊）と共に彼の肖像画及び三稜針、鯨骨サグリ、曲頭管入りの「サック」（更紗製）、また蔵書印と薬広告の版本は元周のご子孫から久保先生に贈られた遺品として大事にすべきです。

また、一九〇七年、日本で最初に摘出された気管支異物や上顎洞性後鼻孔ポリープの世界最初の例など、近・現代の資料も忘れてはなりません。



図 11 講義室の景観

久保猪之吉先生について

さて、久保猪之吉教授に目を向けましょう。(8) 今こ
 で教室における先生の役割と業績を紹介する必要はな
 いと思います。また、医者、医学者としての久保猪之
 吉を評価できる知識は持っておりません。(9) しかし、久
 保先生は日本の耳鼻咽喉科学の草分けというだけでは
 なく、文芸の世界でも活躍する様々な才能に恵まれて

いた人物でした。ここでは、歌人、俳人として名を残した奥様についても触れなくてはなりません。松山出身のよ
 り江さんは子供の頃、祖父に預けられており、その家の離れに下宿していた正岡子規と夏目漱石に可愛がられたと
 言われています。この文学少女は、東京の女学校を卒業後、まもなく久保先生と結婚します。先生は若い頃から和
 歌や短歌に興味があり、子供のいない二人の意向は一致し、福岡で一種の文学サロンが誕生します。(10) フランスのサ
 ロンの多くは、女性の運営の下で繁栄していましたが、当時の写真を見ますと、久保夫妻の周囲には対等に交友し
 ていたように見える数多くの女性がおられます。名譽や権力への野望のようなものはこれらの写真からは読み取れ
 ません。むしろ、先生の心の奥には常に一種の憂鬱が潜んでいる気がいたします。この文学活動は先生にとって現
 実の世界から離れられる機会であり、心の救いでもあったのかも知れません。

登子(小説)	小野 健治 一	或る夜	加藤 介 一 六
馬鹿(詩)	久保猪之吉 二 九	うた二首	より 一 〇 〇 〇
人形と小唄(小説)	川邊 香子 三 二	切抜紙	西巻 透 三 三 三
猫鼠の子(詩)	吳 業 三 三	十二正の鐘	久保 猪之吉 三 三 三
ゴキウ(隨筆)	曾田 共助 一 〇 〇	小樽町より	杏 子 一 六
音楽會の夜(歌)	川崎 達夫 一 〇 〇	その後	見 鳥 一 六
夏草(歌)	うしれ 木 〇 〇	松原より	より 一 〇 〇 〇
哀しき恋(歌)	文 子 一 三 三	アルトのレレ、シムニツラレル氏の 邸宅(絶句)と同氏の筆跡(口繪)	
小品二題	公 孫 樹 一 〇 〇		

図 12 『エニグマ』の目次 (1914 年第 3 号)

大正二年に大学の仲間、学生、教職員と共に久保夫妻は文芸雑誌の『エニグマ』（ギリシャ語で「謎めいた言葉」の意）を刊行することになります。この雑誌は、あまり長くは続きませんでした。勿論、久保先生の作品もここに発表されています。福岡地方における文学・文化活動の産物として「エニグマ」は大変重要であり、和泉僚子氏及び井上洋子氏の研究により再認識されつつあります。¹¹⁾

久保先生の弟子の中に恩師と同じ道を歩んだ方もいました。新潟柏崎出身の曾田恭助氏は、九大医学部を卒業してから、耳鼻咽喉科の医師として活躍しながら「エニグマ」の編集に関与し、短歌も寄せました。久保先生のサロンは福岡で繁栄していましたが、小倉では曾田氏の開放された客間が次第に同様な文化サロンに発展し、数々の業績をあげる場となりました。私は約五年前、大分県中津市で調査を行った際、小倉郷土会の機関誌「豊前」を初めて拝見し、



図13 小倉郷土会編『小倉郷土会の歩み』（2002年刊、展示会図録）

その編集にあたった曾田会長の名前を目にした覚えがありますが、久保先生の関係で再び曾田恭助氏と出会えたことを嬉しく思います。¹²⁾

文学活動の關係で海外にも仲間がいたことも忘れてはなりません。

『エニグマ』第一号に掲載されている書簡から、久保先生はフーゴ・サールス (Hugo Salus) というプラハの詩人にまで繋がるネットワークを築いていたことがわかります。

一九三四年に六十歳になった久保先生のために、海外の方々が三七八ページの分厚い祝賀論文集を作成しました。¹³⁾ 投稿者のリストに目を通しますと、先生はドイツ、オーストリア、デンマーク、イギリス、ロシア、ハンガリー、イスラエル、ブルガリア、トルコ、スウェーデンなど世界中の一流の学者たちと親しく付き合っていたことがわかります。

先生の履歴に見られる業績は膨大なものです。邦文の学術論文は五三〇編、欧文の論文は四十二編、医学外のもの一七二編。さらに、先生は「公益の為私財を寄付し、功績顕著なる者に授与される」紺綬褒章及びフランス最高級のレジオンドヌール勲章を受賞されています。

日本史上初の耳鼻咽喉科学講座の創始者及び地域文化の担い手として先生は我々現代人にも刺激を与える魅力を持っています。職務上の責任をご立派に果たしながら、それを超えて、医学史の遺産を収集したり、詩を作ったり、



惜春会 東公園一方亭にて
左より 吉岡輝寺副 清原樹彦 角青葉 阿野静雲
日原方舟 久保謙之吉 久保より丸 移田久女 三宅新女 福本多世子

図14 惜春会 (東公園の一方亭にて)

様々な分野の人物と交流したりしていた久保先生は、日本の伝統を引き継いだ近代の文人だったと言っても過言ではありません。

今後の課題について

さて、目下の課題へ戻り、これから久保記念館をどうすればよいかということについて、二、三点述べさせていきたいと思います。すでに申し上げましたように、久保記念館は、日本史上初の医学史博物館でもあります。その後は、医学文化館、医の博物館、医療器械博物館、野間科学医学研究資料館などいくつかの類似する博物館や資料館が出来ましたが、その一部はすでに失われてしまいました。また近年、いわゆる大学博物館が注目されていますが、財政的基盤が不安定な総合博物館の枠組みの中で医学コレクションをどれほど活かすことができるかはまだよく見えてきません。これらの博物館に対して、一つの学科により設立され、ほぼ八十年間にわたり守られてきた久保記念館は、大変ユニークなものであり、海外でも見られない価値の高い歴史的遺産です。この記念館とその収蔵品はぜひ後世に伝えていかなければならないと思います。

二〇〇二年の改修のお陰で建物は大変立派になりました。しかし、収納用の筆筒は不足していますので、資料保管のための新しい環境の整備は思う通りに進んでいません。さらに、福岡県西方沖地震とその後数ヶ月間続いた余震により、本棚に置かれた書籍と記録資料の大半が大変傷んでしまいました。また、明治以降の書籍の多くは酸性

紙で出来ており、とても損傷しやすい状態です。埃の問題もありますので、通常の本棚ではなくスチール製のラックあるいは木製の箆笥の購入が今後の重要な検討課題の一つだと思います。

そして、冒頭に申し上げた数多くの器物資料の扱いを考えなければなりません。すべてを展示、披露することは不可能です。一度ご覧になれば、ダンボールの中身を全部出せるスペースはないことがすぐにご理解いただけると思います。そのため、久保記念館の目的を検証する必要があります。総面積はとも十分とは言えませんので、後世のため収蔵品の保管に専念することは、運営管理上の一つの妥当な選択肢に違いありません。手本となる施設は十分にあります。しかし、多少の工夫をすれば、妥協の線を見つけ出すことも可能ではないかという気がいたします。例えば二階を完全に収納のために利用し、一階を教育、見学用の快適な展示室に仕上げることが考えられます。収蔵品の活かし方はいかがでしょうか。久保記念館は医者だけではなく医史学、蘭学、洋学の研究者にとっても研究資料の宝庫であり、一般の社会人にとっては久保猪之吉が創設した九州大学耳鼻科教室及び医療の歴史を語る興味深いものでもあります。しかし、今でさえ研究、教育や患者の治療に忙殺されている教室の皆さんに、見学者の案内や閲覧者の応対をお願いする訳にはまいりません。

図書館の貴重古医書コレクションの関係で、私が兼任で所属している研究開発室は同様の問題を抱えています。それで、我々は四年前に一つの試みとして研究成果発表費を獲得し、古医書画像資料データベースを公開いたしました。⁴⁰ 解像度の高い写真の撮影は業者に依頼し、ソフトウェアは研究開発室の喜田拓也講師が開発してくださいました。各画像に英語、日本語、フランス語のキーワードを付けましたので、海外の方々もデータベースを検索でき

ます。器物資料の場合は状況が多少違うかも知れませんが、文書資料のよい画像を公開すれば、実物を見なくても十分に研究できます。もしかしたら、久保記念館の場合も収蔵品のインターネットにおける公開が一つの効果的な方法となるかも知れません。

- (1) 九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室『教室開講六十周年記念写真集』、一六六七年。
- (2) 『学士鍋』第二十七号（一九七八年八月十日）、二〇五頁。
- (3) 『九大耳鼻喉科一九八七年』九州大学医学部耳鼻咽喉科学教室開講八十周年ならびに村上卓也教授開講五周年記念出版（五十二頁）。
- (4) 九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室編『久保記念館』、昭和九年十一月（三十五頁）。
- (5) 九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室編『久保記念館 目録及び解説』（二十四頁）。
- (6) 一九三二年までの洋書は当時の系統的物件索引式の目録に収録されている。Katalog der Bibliothek der Ohren-, Nasen- und Halsklinik (Direktor : Prof. Dr. Ino Kubo) der Kaiserlichen Kyushu-Universität zu Fukuoka, Japan. Fukuoka, Mai 1932.
- (7) 村上卓也『久保記念館の蔵書について』『四三会誌』第六十三号、昭和六十（一九八五）年七月。
- (8) 佐尾裕子「久保猪之吉」『近代文学研究叢書』第四十六巻、一二五〜一九八頁、昭和女子大学近代文学研究所、一九七七年。
- (9) 医学者による評価については、『耳鼻咽喉科』第十三巻十一号、七九九〜八一頁（一九四〇年十一月）を参照。
- (10) 福岡シティ銀行編『博多と北九州の文化サロン 博多の久保猪之吉・より江夫妻と北九州の曾田恭助』『For You』、通巻八十七号、二〇〇三年三月刊（十一頁）。

- (1) 和泉儼子「久保猪之吉・より江夫妻と雑誌「エニグマ」の周辺について」『福岡県地域史研究』第十六号（一九九八年三月三十一日発行）。井上洋子「『エニグマ』発行の経緯と総目録」『敍説』Ⅱ-106、花書院、二〇〇三年八月。（情報と資料を下さった曾田豊二先生に心よりお礼を申し上げる。）井上洋子「近代詩詩の夜明け——福岡の短歌と俳句」福岡市文学振興実行委員会編『福岡の近代文学』十三〜二十六頁、二〇〇四年三月刊。
- (2) 小倉郷土会『小倉郷土会のあゆみ 曾田恭助につづく人々』（図録）、北九州市、平成十四年（企画・編集は柿田半周、松岡昭彦、馬渡博親により）
- (3) Festschrift Ino Kubo. Zu seinem 60. Geburtstag (26. Dezember 1934) von seinen ausländischen Freunden gewidmet. Tokyo, The Herald Press, 1934. 一連の記念講演の収録も出版された：Feier und Festvorträge am 1. und 2. Dezember 1934 anlässlich des 60. Geburtstages von Prof. Dr. Ino Kubo Direktor der Ohren-, Nasen- und Halsklinik der Kaiserlichen Kyushu Universität zu Fukuoka, 1934（九十五頁）。
- (4) 九州大学附属図書館医学分館所蔵古医書画像データベース (<http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/icomb/>)。